

知的障害者の経済的自立と家庭での役割や余暇活動 の実態に関する調査研究

武藏 博文・水内 豊和*

(特別支援教育講座) (富山大学人間発達科学部)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*930-8555 富山市五福3190 富山大学人間発達科学部

Research into Economical Independence and the Actual Situation of At-home Roles and Leisure Activities for Person with Intellectual Disabilities

Hirofumi Musashi and Toyokazu Mizuuchi*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Faculty of Human Development, University of Toyama, 3190, Gofuku, Toyama 930-8555*

要 旨 水内・武藏(2008)は、特別支援学校高等部を卒業して地域で生活する知的障害者の生活実態調査を行った。本報告では、そのうち、本人の経済的な自立の程度と、家庭での家族との余暇及び一人での余暇、家庭内での決まった役割の実態を報告した。

本人がひと月に使用する金額は就労形態により大きな差があり、就労者でも親が管理している場合があった。家庭での家族との余暇は、本人が家族との関わりに参加している様子が示され、積極的に関わりを作り出そうとする様子もみられた。一人での余暇は、現在の一般家庭にみられるものであり、ひと月に使用できる金額、家族との余暇の影響を受けていた。手伝いも一人での過ごし方となっていた。家庭内での決まった役割は、手順がはっきりしていて評価を受けやすいもの、単純で結果が分かりやすいものであった。就労者や施設通所者でも、家庭での役割が定まらず、家族内でも対応に苦慮している場合があることも示された。

本人の余暇の状況を、経済的な自立の程度、家族との余暇、家庭内での決まった役割と関連させて捉えて考察した。

キーワード 経済的自立 金銭管理 家庭での余暇 家庭での役割 知的障害者

問題と目的

我が国の障害者施策は、障害者基本計画(2003年)により「地域において自立し安心して生活できること」を基本に位置づけた。さらに、障害者自立支援法(2006年)では、本人あ

るいは家族のニーズに応じた様々な生活支援サービスを提供することをめざしている。

学校教育においても、特別支援教育が本格実施される(2007年)中で、個別的教育支援計画を策定して活用することとなった。在学中から作成し活用される支援計画の具体的な内容を検

討するためにも、学校卒業後の生活の実態を把握し検討することが求められる（原・菅野、2008）。

全国手をつなぐ育成会（2004）は、アンケート調査の結果、知的障害者が余暇生活において活動内容を制約されていることを示した。作業所や会社の後の過ごし方では、「まっすぐ家に帰る」が圧倒的に多く、家の中で「テレビの視聴」「音楽鑑賞」「読書」が多数であったとしている。郷間・藤川・所（2007）は、自宅で「テレビやビデオを見る」「音楽を聴く」「ゲームをする」「ゴロゴロする」等が多かったと報告し、具体的な余暇の過ごし方を学習することの必要性を指摘した。成人知的障害者の生活の質の向上をめざすには、家庭内での生活状況をより多角的に捉えて、支援の方向性を見いだしていくことが必要である。

その手がかりを得るために、成人知的障害者の家庭内での社会的な位置づけを、本人の経済的な自立の程度、家庭での家族との余暇及び一人での余暇、家庭内での決まった役割といった異なった視点から構成して捉えることは意義のあることである。加えて、学校在学時に受けた教育が、学校卒業後の家庭生活に及ぼした影響を明らかにすることも大切な点である。

すでに、武蔵・高畑・平野・安達（1996、1997）は知的障害者の生活実態に関するアンケート調査を試みた。それをもとに、水内・武蔵（2008）、武蔵・水内（2009）は、富山県内の特別支援学校（これまでの知的障害養護学校）の高等部を卒業して地域で生活する知的障害者の生活実態調査を実施した。

本研究では、この生活実態調査の結果より、本人の生活状況から「おこづかい・金銭管理」に関する項目、ふだんの家での生活から「家族との過ごし方」「一人での過ごし方」「決まった役割・お手伝い」「学校での教育で役立ったこと」に関する項目を取り上げ、成人知的障害者の経済的自立と家庭での役割と余暇活動の実態を把握し、その問題点を分析して支援の手がかりについて検討することを目的とする。

方法

1. 調査対象

富山県下の知的障害者を主な対象とする特別支援学校5校において、これまでに高等部を卒業した者のうち、連絡可能な者全員を対象とした。対象者の総数は1,175名であった。

2. 調査内容

生活実態アンケート調査は、①本人の生活状況、②健康やからだの様子、③ふだんの家での生活、④休日等の屋外での過ごし方、⑤地域活動・スポーツ、⑥パソコン・携帯電話の利用、⑦本人の考え、⑧今後の生活の8分野から構成された（水内・武蔵、2008）。本研究では、そのうち、本人の金銭管理とふだんの家での生活に関する項目を取り上げる。

3. 調査の実施方法と実施時期

調査対象となった各学校及び各学校の同窓会に協力をいただき、往復郵送により調査を実施した。対象者には同窓会の会報等を通じて調査への協力をお願いするとともに、調査用紙の送付に当たって、調査の趣旨、個人情報扱い、調査用紙への記入及び返送の方法についての説明文書を同封した。本人がアンケートに記入することが困難な場合、本人の意見や考えがはっきりしない場合は、本人に変わって保護者が記入するように依頼した。調査の実施期間は2007年5～7月であった。

4. 調査の回収と結果の整理

回収総数は367名（回収率31.2%）、男性236名、女性130名、不明1名であった。選択による回答は項目ごとに集計した。記述による回答は重複を避けて整理した。

結果

1. お金・こづかいの金額と管理、使い道

（1）ひと月に使うお金・こづかいの金額

本人の経済的な自立の程度を知るために、ひ

と月に使うお金・こづかいの金額を質問した。288名(78.4%)が金額を回答し、79名(21.5%)は無回答であった。それぞれを、就労形態を示して図1にまとめた。

「千円以上5千円未満」という回答が23.7%(87名)で一番多かった。この回答のうち、通所施設・作業所等に通っている者が7割近く(59名)、企業等に就労している者が2割近く(17名)を占めていた。ひと月に使うお金・こづかいの金額を回答した施設通所者全体の半数以上が5千円未満のこづかいであった。

「5千円以上1万円未満」(15.5%, 57名)で、そのうち、施設通所者が約半数(29名)、就労者が約4割(22名)であった。「1万円以上2万円未満」(20.2%, 74名)で、そのうち、就労者が約半数(39名)、施設通所者が約4割(29名)であった。さらに「2万円以上」(15.5%, 57名)で、そのうち、就労者が約9割(50名)、施設通所者は5%(3名)であった。このように、ひと月に使うお金・こづかいの金額が上がるにつれて、就労者の割合が増加した。金額を回答した就労者全体の約7割が1万円以上のこづかいであった。

自営の者は数が少なく、はっきりとしないが、無回答の者を除くと、ひと月に使うお金・こづかいは1万円以上であった。居住施設の入所者および在宅の者は、半数が無回答であった。回答した者は、ひと月に使うお金・こづかいが2万円未満で、5千円前後の回答が多かった。以上の結果から、本人がひと月に使う金額は就労形態により大きな差が生じていることが示された。

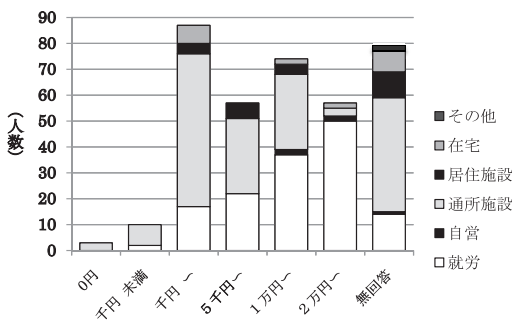


図1 ひと月に使うお金・こづかいの金額

(2) お金・こづかいの管理の仕方

(1)と同じく、本人の経済的な自立の程度を知るために、お金の管理の仕方を選択式で質問した。351名(95.6%)が回答し、16名(4.4%)は無回答であった。それぞれを、就労形態を示して図2にまとめた。

「親が管理して本人の求めに応じて与える」という回答が40.6%(149名)で一番多かった。この回答のうち、施設通所者が約6割(91名)、就労者が約3割(42名)を占めた。就労者で、ひと月に使うお金・こづかいの金額が多い者にも、親が管理して本人の求めに応じて与えるという回答が多く存在した。

「本人が自分で行う」(18.0%, 66名)、「一定の額をこづかいとして本人に渡している」(19.6%, 72名)で、これらを合わせ、ある程度のお金を自分で管理して使うという回答は、就労者が約6割(87名)、施設通所者が約3割(34名)を占めた。施設通所者の中にも、限られた金額ではあるが、自分でお金を管理している者がおり、お金の管理の仕方を回答した施設通所者全体の約1/4であった。

「お金を使わない、関心がない」という回答は9.5%(35名)で、そのほとんどは施設通所者と施設入所者であった。

「その他」(6.0%, 22名)という回答には、「施設で管理してもらっている」「施設の保護者会にお願いしている」が合わせて8名、「ほしい物があるときいっしょに買いに行く」「自動販売機で飲み物を買うだけ」が合わせて5名、「グループホームの世話人に管理をお願いしている」「グループホームで管理の仕方を勉強中」

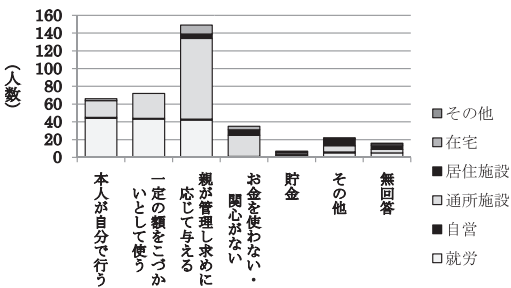


図2 お金の管理の仕方

が合わせて4名であった。

(3) お金・こづかいの使い道

本人の経済的な生活の内容を知るために、お金・こづかいの使い道を複数選択式で質問した。92.9% (341名) から得た回答を図3にまとめた。

「ジュース等の飲み物」という回答が68.6% (234名) と多く、次いで「本・雑誌・新聞」(43.7%, 149名)、「お菓子」(41.3%, 141名)の順であった。自動販売機やコンビニエンスストアでジュースやスナック菓子等を買って飲食する、本人の限定した興味範囲の本や雑誌を購入するといった、日常的に決まって繰り返される、自分の物を中心とする消費行動であった。

さらに、「弁当・パン」(24.0%, 82名)、「レストラン等で食事」(13.8%, 47名)等の飲食に関する内容、「美容院・床屋」(28.7%, 98名)、「服・靴」(16.1%, 55名)、「文具」(12.6%, 43名)等の身なりやファンシーグッズに関する内容、「CD・ビデオを買う」(26.1%, 89名)、「CD・ビデオをレンタル」(17.6%, 60名)、「ゲームソフト」(12.3%, 42名)等のエンターテインメントに関する内容が多かった。これらは、通常の成人に見られる消費行動と同様であると考

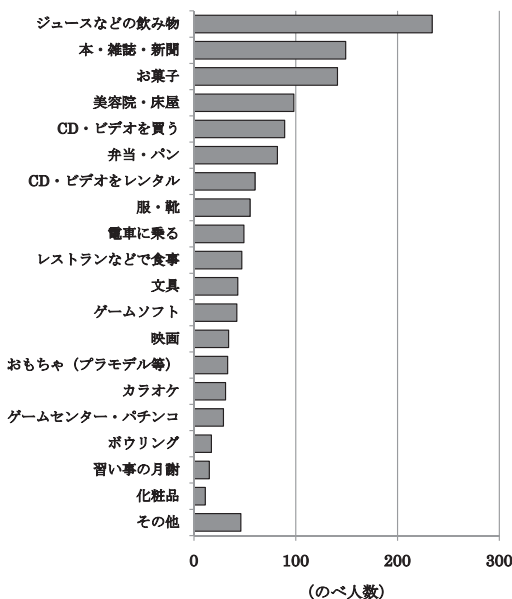


図3 お金・こづかいの使い道

えられる。

特徴的なのは、「電車に乗る」(14.4%, 49名)が回答者の約1/7にみられたことである。本設問からでは電車に乗ることの目的は定かではないが、身近な乗り物に乗ることがお金の使い道の一つになっている。

「その他」(13.5%, 46名)という回答には、「サークル等の参加費」が5名、「薬代、医療費」が3名、「車のガソリン代」「歌手のファンクラブ」が各2名であった。ほかに、「携帯代」「交際費」「趣味の物 (手芸用品, 時計, ぬいぐるみ, キーホルダー)」「ダイエット食品」「銭湯代」「定期代」「旅行費」「漫画喫茶」等であった。「お金は使えない」「わからない」という記述も4名にあった。

2. 家庭での過ごし方・余暇

(1) 家族との過ごし方・余暇

家庭での家族との余暇の状況を知るために、家庭で家族と過ごすときの内容を複数選択式で質問した。329名 (89.6%) から得た回答を図4にまとめた。

「テレビ」(82.7%, 272名)、「食事」(78.7%, 259名)が飛び抜けて多かった。いずれも生活の中で、互いをあまり意識することなく、場

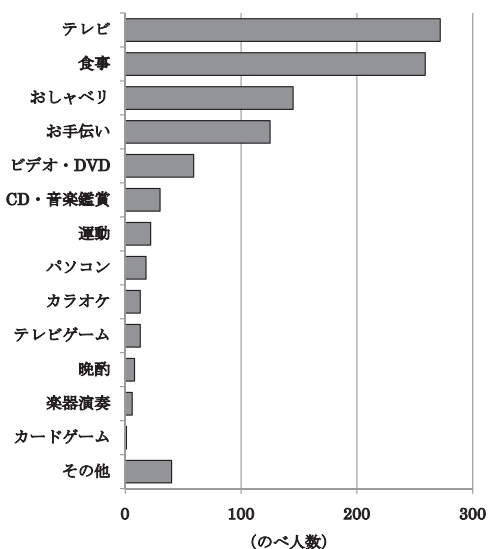


図4 ふだん家で家族とすること

を同じくして行われていることである。それに対し、「おしゃべり」(44.1%, 145名)、「お手伝い」(38.0%, 125名)は、毎日の生活日課の中で自然に生じる関わり合いである。さらに、「ビデオ・DVD」(17.9%, 59名)、「CD・音楽鑑賞」(9.1%, 30名)は、直接的な関わり合いは低いですが、互いの興味や関心を共有した活動といえる。「運動」(6.7%, 22名)、「カラオケ」(4.0%, 13名)、「楽器演奏」(1.8%, 6名)は、生活日課とは異なり、とくに時間や場所を設定して行う、互いの関わり合いを伴う過ごし方といえる。このように、本人が家庭内での家族との関わりに参加している様子が示された。ただ参加するだけでなく、家庭の中での関わりを積極的に作り出そうとする動きもみられた。

「その他」(12.2%, 40名)という回答には、「何気なく一緒にいる」「自分の世界にいる」「好きなことにふけている」が合わせて9名であった。さらに「買い物」が8名、「ドライブ」が5名、「お風呂・健康ランド」が4名のように、家庭という場での活動を質問したにもかかわらず、それに限定されない回答もあった。ほかに、家庭での活動として「いろんなことを話し合う」「カメラ」「クロスワード」「洗濯」「読書」「トランプやゲーム」「日記を一緒に書く」等があがった。家庭の外での活動として「奉仕活動に参加」「畑仕事」「旅行・ドライブ」等があげられた。

次に、家庭での家族との余暇の状況をより知るために、家庭で家族と過ごす時間をもてない場合について、その理由を選択式で質問した。42名(11.4%)から得た回答を図5にまとめた。

過ごす時間がないという回答自体が全体の1割程度しかなかった。前記の質問と合わせて、程度の違いはあっても、多くの家庭で家族との余暇を持てる状況にあると、本人あるいは家族が考えていることが分かる。

過ごす時間をもてないと回答した者のうち、就労者が約5割(20名)、施設通所者が約3割(13名)であった。過ごす時間をもてない理由として、「本人が好きなことをしているから」という回答が47.6%(20名)と最も多く、「共通

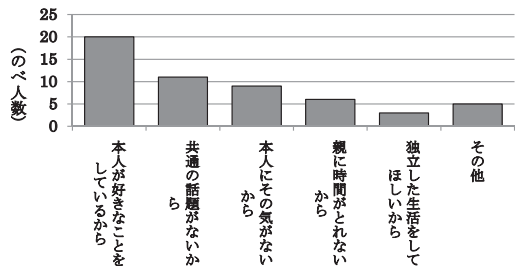


図5 一緒に過ごす時間があまりない理由

の話題がないから」(26.2%, 11名)、「本人にその気がないから」(21.4%, 9名)であった。生活面では同居して金銭等の管理を受けていても、家族とのつながりが希薄となる場合があることが示された。

(2) 一人での過ごし方・余暇

家庭での本人一人での余暇の状況を知るために、一人での過ごし方を「ほぼ毎日する」と「たまにする」に分けて複数選択式で質問した。「ほぼ毎日する」に339名(92.4%)、「たまにする」に272名(74.1%)から得た回答を図6にまとめた。どちらかでも回答した者は345名(94.0%)、いずれにも回答していない者は22名(6.0%)であった。

「ほぼ毎日する」「たまにする」のいずれにおいても、「テレビ」という回答が、毎日するで76.7%(260名)、たまにするで21.3%(58名)と飛び抜けて多かった。それに続いて、「ビデオ・DVD」(毎日37.2%, 126名、たまに17.6%, 48名)、「CD・音楽鑑賞」(毎日34.5%, 117名、たまに19.1%, 52名)であった。これらは、前記の家族と過ごすときの内容と同じである。テレビの娯楽番組、映像や音楽のエンターテインメントを視聴するという現在の一般家庭の生活を、障害者本人自身も享受していることが分かる。

「ごろ寝」(毎日28.3%, 96名、たまに13.6%, 37名)は回答者の約4割にみられた。本設問だけからではその理由ははっきりとしないが、家庭で一人で過ごす時間をもてあましているのか、行っているのにやる気が生じないのか、それとも積極的な休憩・息抜きなのか、そ

の意味を考える必要があるであろう。

「お手伝い」(毎日22.4%, 7名, たまに19.9%, 54名)は, 保護者や家族の付き添いを必要とせずに家庭での役割を果たしていることを示している。手伝いそのものが一人での過ごし方となっている。手伝いが一人で行えるためには, 家庭の状況が安定していること, 本人がその内容を一人で行えるだけの技能を身につけていることが必要であろう。

さらに, 「雑誌を読む」(毎日22.7%, 77名, たまに14.0%, 38名), 「新聞を読む」(毎日23.0%, 78名, たまに9.2%, 25名), 「マンガを読む」(毎日17.7%, 60名, たまに8.5%, 23名), 「テレビゲーム」(毎日17.4%, 59名, たまに7.4%, 20名)等が続いた。これらはお金・こづかいの使い道と一致する内容である。決まった範囲の金額で, 毎週, 毎月のように繰り返して購入し, 一人での余暇にしていることが分かる。

「その他」(毎日9.7%, 33名, たまに8.5%, 23名)という回答には, 「友達に電話」が3名, 「プラモデルを作る」「絵や字を書く」「散歩」が各2名であった。ほかに, 「クロスワードパズル」「カラオケ」「ペットと語る」「花の水遣り」

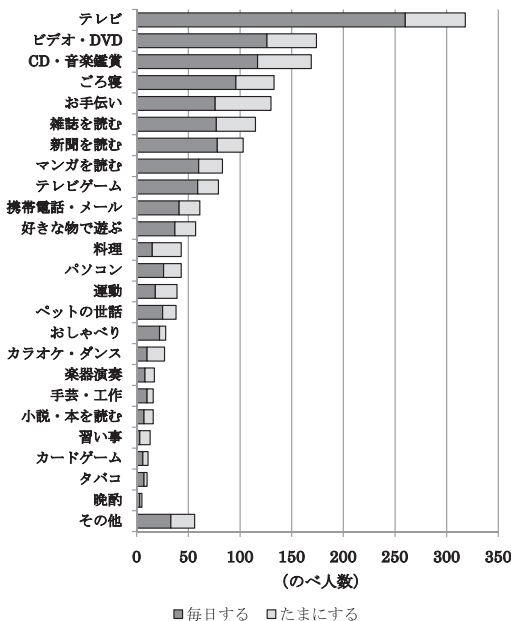


図6 ふだん家で一人ですること

「洗濯・掃除」「紙をくしゃくしゃに丸める」「機械の解体」等であった。

3. 家庭での決まった役割

家庭での役割・働きを知るために, 家庭での決まった役割・手伝いの内容について限定記述式で質問した。255名(69.5%)から得た回答を分類して表1にまとめた。

「食事の準備・片づけ」に関する内容が57.6%(147名)と最も多く, 「料理・食事づくり」

表1 家庭での決まった役割・手伝い

回答者数	255
のべ回答数	495
食事の準備・片づけ	147
食器洗い・拭き, 食後の片付け, 配膳・食器ならべ, テーブル拭き	
洗濯・洗濯に関すること	81
洗濯物たたみ・干し・取り込み, 洗濯, タオルたたみ, アイロンがけ, 洗剤詰め替え, 洗濯物片付け・運び	
掃除	63
掃除, 部屋掃除, 玄関掃除, トイレ掃除, 廊下掃除, 階段掃除, 洗面所掃除, 窓拭き, 雑巾がけ, モップがけ, 拭き掃除, 掃除機がけ, ダスキンがけ	
料理・食事づくり	58
米とぎ, 食事・ごはんの用意, お茶・麦茶いれ, 味噌汁づくり, 食事の手伝い・簡単な料理, 電気釜のセット	
風呂	41
風呂掃除・洗い, 風呂に湯をはる・沸かす, 入浴剤いれ, 入浴・風呂用意	
ゴミだし	18
ゴミだし・捨て, ゴミの分別, ゴミの収集, 生ゴミだし, ゴミの焼却	
屋外の仕事	17
草むしり, 庭の手入れ, 花の水やり・水まき, 野菜作り, 畑仕事	
買い物, 荷物運び	15
ペットの世話, 犬の散歩	12
布団の上げ下ろし	9
新聞取り	7
家事全般・手伝い	7
仏壇・神棚の水替え	5
牛乳パック切り, 灯油入れ, 靴ならべ	各2
回覧板, 新聞配達, タイヤ取り替え, 電話番, マッサージ, 録画予約, 戸締まり, 蚊取り, カーテン閉め	各1

(22.7%, 58名)と合わせると、決まった役割があると回答した者の約3/4が食事・料理に関する内容を回答した。次いで、「洗濯・洗濯に関すること」(31.8%, 81名), 「掃除」(24.7%, 63名), 「風呂」(16.1%, 41名)といずれも家庭生活の基本的な内容である。この中には、ある程度独立した役割として責任を持って取り組んでいる場合と、家族が行う家事のうち本人が行える部分のみを分担している場合とがあると考えられる。

決まった役割・手伝いの多くは、毎日の家庭の生活で繰り返し行われることで、「洗濯」「掃除」のような負荷の高い役割であっても手順がはっきりしていて評価を受けやすいもの、「食事の準備・片づけ」のように単純で結果が分かりやすいものが多かった。施設入所者の中にも帰宅時に手伝いをしているという回答があった。家庭という共同体の中で、それなりの役割を担っていることが分かる。

次に、家庭での役割・働きをより知るために、家庭で決まった役割・手伝いをしていない場合について、その理由を選択式で質問した。95名(25.9%)から得た回答を図7にまとめた。

決まった役割がないという回答は全体の約1/4に及んだ。この回答のうち、就労者が約3割(33名)、施設通所者が4割を超えて(43名)いた。決まった役割のない理由として、「とくに決めていないから」(53.7%, 51名), 「本人がやりたがらないから」(26.3%, 25名)が多かった。前記したように決まった役割があるという者がいる一方で、家庭内で何も役割を果たさずに家族の擁護を受けている者もいることが

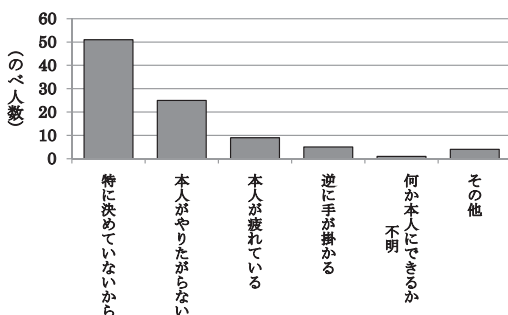


図7 決まった役割・手伝いのない理由

分かる。就労者や施設通所者で、日中の働く生活のある者でも、家庭に帰ってくると役割が定まらず、家族内でも対応に苦慮している場合がある。家庭外での生活がありながら、家庭内での役割・働きが不明確である要因について今後さらに検討が必要である。

4. 学校での教育で役立ったこと

学校在学時に受けた教育が家庭での生活に及ぼした影響を知るために、学校での教育で役立ったことについて自由記述で質問した。139(37.8%)名から得た回答を分類して表2にまとめた。

「生活習慣全般」という回答が25.2%(35名)で多く、次いで「礼儀、コミュニケーション・社会性」(23.7%, 33名)であった。いずれも、学校での生活学習や生活指導を通じて身につけた内容といえる。家庭や保護者が規則正しい生活態度や基本的な生活習慣に関する内容を求めることは分かるが、あいさつ・言葉遣い・人のいうことを聞く等の基本的なコミュニケーション能力、協調性・気遣い・前向きな態度・自分から取り組む態度等の社会性や自発性に関する内容も多くあげられた。これは、現状の家庭や地域で、知的障害者のこうした課題に取り組むことに難しさがあることを示している。障害の重度重複化によるのか、家庭における問題の複雑さが増したためか、家庭の教育力の低下によるのか、更なる検討が必要である。

さらに、「学習に関すること」という回答が19.4%(27名)であった。読み書き、計算等の生活の中で使われる実用的な学業能力を評価するものである。回答した者の約2割にすぎなかった。学業能力を家庭の実生活に生かす機会がどれくらいあるのかを検討する必要がある。

「整理整頓・掃除」(18.7%, 26名), 「料理・食事の手伝い」(18.0%, 25名), 「お手伝い」(8.0%, 11名)等は家庭での決まった役割・手伝いであげられた内容と重複する。家庭生活に直接に関係する内容である。

家庭での余暇に関する回答は「手芸・裁縫、ミシン」(5.8%, 8名), 「身体を動かす, 運動・

表2 学校教育で役立ったこと

回答者数	139
のべ回答数	211
生活習慣全般	35
規則正しい生活、身の回りのこと、身辺自立、靴の脱ぎ方、手を洗う、トイレの使い方、時間を守る	
礼儀、コミュニケーション・社会性	33
あいさつ、言葉遣い、協調性、気遣い、人の言うことを聞く、報告・質問する、何事も前向き、自分から取り組む	
学習に関すること	27
文字の読み書き、日記をつける、時計が読める、計算する、お金が分かる、家計簿をつける、名前・住所が書ける	
整理整頓・掃除	26
身辺整理、部屋の片付け、衣類・寝具の始末、朝の準備、持ち物の管理、部屋掃除、掃除機がけ、風呂掃除、ゴミだし、ゴミの分別	
料理・食事の手伝い	25
簡単な料理、食事の手伝い、食事の準備・片付け、米とぎ、味噌汁づくり	
お手伝い	11
手伝いができる、手伝いをしてくれる、手伝いの習慣	
手芸・裁縫、ミシン	8
洗濯、洗濯物たたみ、アイロン	8
集団生活	7
仕事・働くこと	6
交通機関の利用	6
身体を動かす、運動・スポーツ	5
習ったいろいろなこと	5
余暇活用	5
パソコン、カラオケ、習った歌	
買い物	2
農作業	2

スポーツ」(3.6%, 5名), 「余暇活用(パソコン、カラオケ、習った歌)」(3.6%, 5名)と少なかった。

考察

成人知的障害者の生活の質の向上をめざすために、本人の経済的な自立の程度、家庭での家族との余暇及び一人での余暇、家庭内での決まった役割をまとめて報告した。本人がひと月

に使用する金額は就労形態により大きな差があり、就労者でも親が管理している場合があった。就労者や施設通所者にも、家庭での役割が定まらず、家族で対応に苦慮している場合があることも示された。本人の余暇の状況を、経済的な自立の程度、家族との余暇、家庭内の決まった役割と関連させて考察する。

1. 本人の経済的な自立の程度と本人の余暇

本人の経済的な自立の程度を、ひと月のお金・こづかいの金額と管理、使い道といった点から質問した。施設通所者の半数以上が5千円未満のこづかいであった。就労者でも親が管理して求めに応じて与える者が多くいた。このように、知的障害者の経済的な自立の程度が低く、そうした家庭生活を学校卒業後も長い間続けていることが分かった。

そのため、こづかいの使い道は日常的に決まって繰り返される自分中心の消費活動に限定されていた。一人での過ごし方を問うた設問に飲食に関する選択肢がなかったが、それを除くと、ひと月のお金・こづかいの使い道とふだん一人ですることの多くが一致する。本人の経済的な自立の程度が家庭での一人での余暇に影響していると考えられる。

お金・こづかいを管理されて与えられる形から、自分で目的意識を持って計画的に使用する方向へ変えていくことが大切である。そうすることにより、飲食や購買といった自己消費型の行動から、生活を前向きに送るための積極的な余暇活動へ転換を図る可能性が生まれる。家庭での積極的な余暇活動によって、仕事と生活の関連を高めることができる。

お金の価値や計算ができない場合でも、トークン・エコノミーとして、具体的な強化刺激と交換できる代替物としての機能は了解できるであろう。こうしたシステムを家庭支援を通じて家庭の中に定着させることが、家庭での余暇の内容を検討するのに先立って必要である。

2. 家庭での家族との余暇と一人での余暇

家族との余暇の状況を、家族との過ごし方、

過ごす時間のない理由といった点から質問した。過ごす時間がないという回答は少なく、多くの家庭で本人と家族とが一緒に過ごしていることが分かる。その過ごし方は、テレビの視聴や食事、おしゃべり等の現在の一般家庭によく見られるものであった。本人の就労形態や年齢を問わず、大きな違いがみられなかった。

知的障害者の場合、学校を卒業すると、一部のサークル活動等を続けている者を除いて、大多数は交遊範囲が狭く、同世代とのつきあいが限定・固定化されてしまう。その結果、テレビ等のメディアや、保護者や家族からより大きな影響を受けることになる。事実、ふだん家族とすること、家で一人ですることの多くが一致する。家庭での家族との過ごし方が本人一人での過ごし方に影響すると考えられる。

そこでまず、家族との過ごし方・余暇への支援を行い、家族が本人と行える内容を充実させ、家庭での取り組む気にさせることである。本人に家族内で十分に経験させて、その内容と仕方を習得させた後に、一人での余暇に移行する。これを家族全員が意図的に行っていくことが本人の余暇活動の充実につながるであろう。

3. 家庭内での決まった役割と本人の余暇

本人の家庭内での社会的な位置づけを、決まった役割、決まった役割のない理由といった点から質問した。決まった役割として、それぞれの家庭の実情に合わせ、家庭生活に関するかなり幅広い内容が取り上げられた。本人の能力や特性に応じて、独立して責任を持って取り組んでいる場合や、本人が行える一部分のみを分担している場合があった。

家庭での家族との過ごし方や本人一人での過ごし方の一つとして、手伝いが取り上げられた。手伝いは決まった役割としてだけでなく、家族との余暇あるいは本人一人での余暇の一つとしても捉えられることが分かる。手伝いの多くは、手順がはっきりしていて評価を受けやすいもの、単純で結果が分かりやすいものであった。そこで、学校在学時において家庭生活に関

する指導を充実させる、卒業後も生涯学習の一環として家庭支援を継続することにより、本人の能力に応じた決まった役割・手伝いの実行可能性が高まれば、本人の家庭での役務・働きが高まると共に、家庭での余暇活動の充実にもつながると考えられる。

その一方で、家庭での決まった役割が定まらず、学校卒業後もその状態が長く続き、保護者や家族も対応に苦慮している場合があった。決まった役割のない理由に、「決めていない」「やりたがらない」が多くあげられた。これは、できることがないわけではない、やらせればやれないわけではない、つまり、行う技能も行う機会もあるのに、実行しない状況にいるのである。家庭での役割を果たすことの動機付け・社会性に焦点を当てた支援を考える必要がある。家庭での役務・働きが高まることが、家庭での家族との余暇、本人一人での余暇の充実につながる可能性がある。

謝辞

調査の実施に当たり、富山県立にいかわ養護学校、富山県立しらとり養護学校、富山県立高岡養護学校、富山県立となみ養護学校、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校の各学校及び各学校の同窓会の皆さんに多大な協力を得ました。記して感謝申し上げます。

文献

- 原智彦・菅野敦（2008）養護学校卒業生における社会生活上の課題についての検討 東京学芸大学紀要総合教育科学系，59，489-494.
- 全国手をつなぐ育成会（2004）つどう・でかける・あそぶ・ハマる：知的障害児者余暇活動研究事業報告書.
- 郷間英世・藤川聡・所久雄（2007）知的障害者の余暇活動についての調査研究 奈良教育大学紀要，56巻，1号（人文・社会），67-70.
- 武蔵博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1996）知的障害者の地域生活援助に関する基礎研究 富山大学教育学部紀要A（文科系），No.48，99-110.

- 武藏博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1997）
知的障害者の家庭生活に関する基礎研究 富山
大学教育学部紀要A（文科系），No.49, 43-50.
- 水内豊和・武藏博文（2008）知的障害者の地域生活
の実態に関する調査研究 とやま特別支援学年
報, 2, 27-39.
- 武藏博文・水内豊和（2009）知的障害者の地域参加
と余暇活用に関する調査研究 富山大学人間発
達科学部紀要, 3巻, 2号, 55-61.